

インド西部地震後における 農村部の復興活動に関する研究

現地支援組織 SETU < ヒンズー語：橋の意 > の設立と活動に着目して

藤枝 絢子

キーワード：インド西部地震、復興活動、現地 NGO、ネットワーク
SETU、持続可能性、住民参加

1. 研究の背景と目的

2001年1月26日にインド西部のグジャラート州カッチ(Kutch)県を震源地とするマグニチュード 7.7の地震が発生した。インド政府によって確認された地震の被害は、死者数 20,005 人、負傷者数 166,000 人、総被災者数は州の総人口の 42 パーセントにあたる 1,500 万人に及んだ。地震発生後、200 を超える支援団体が被災地に集まり、復興活動を行った。2003 年 8 月、このような支援団体による復興の現状を調査するため、現地調査を実施した。現地調査を通じて、多様な支援団体の中に、SETU と呼ばれる特徴のある組織があることが明らかになった。本研究は、現地支援組織である SETU の設立と活動を明らかにすることを目的とする。

2. SETU の特徴

(1) 設立と活動の背景

インド西部地震は、被害が広範囲だったことに加えて、州政府が長期的な目標を立て、NGO の活動を考慮した復興政策や方針を作ったことが特徴的である。

そして、カッチ県は、地理的に孤立している（自然）、主産業の農業が発展していない（経済）、村行政組織（panchayat）が機能していない（政治）、カースト制度によって階級システムが社会を支配している（社会）などを始めとして、多くの問題を抱えている。また、歴史的に NGO の活動が盛んで、NGO がネットワーク化して活動していることも特色である。

(2) 構成と活動

SETU は、国際機関（UNDP）、州政府（GSDMA）、NGOs、コンサルタント、などの関係者と協力体制を構築している。SETU の構成スタッフは、専門家、NGO のスタッフ、現地住民、と異なった背景を持

つ者によって成り立っている。活動は、“情報の伝達”と“関係者間の調整”としており、現地住民、支援団体、行政機関で必要な情報を収集、伝達し、現地における活動の調整を行っている。その活動は、救援期、復興期、開発期と時間の移行に伴い、対象を変化させている。

(3) 効果

農村部の 10 の村を対象に村に復興活動とその支援について現地調査を実施した結果を、支援の形態別（1. NGO の支援なし、2. 外からの NGO による支援、3. 現地 NGO による支援、4. SETU + NGO の支援）にまとめ、それぞれの復興活動の特徴を考察した。その結果、SETU によって、

1. 支援を必要としているが支援を得ることのできなかった住民と支援団体を結びつけることができたこと、

2. 現地の長期的な発展につながる、持続的な復興活動が可能になっていること、
が明らかになった。

3. 結論

本研究では、SETU が適切な情報を収集・伝達し、関係者間の調整を行うことによって、地震後に現地住民が必要としている支援の供給が可能となっている。その背景には、関係者と共通の目的を持ち、協力関係を築いていることがある。インド西部地震がその SETU の設立のきっかけとなっているが、その背景には、現地在常時抱えている問題が深く関連している。そのために、SETU は、今後根底にある問題を解決していく必要があると考えられる。

また、最終目的として、支援を必要としない自立した住民やコミュニティをつくるために、SETU がどのような役割をしていくべきか考えなければならない。